

木口記念会館だより

臨時号
平成 28 年 12 月 22 日発行

全国の障がい者支援団体が集う ひょうごボランティアスクエア 21 「市民活動団体交流の集い 2016」

全国各地の障がい者支援団体が一同に会して意見交流をするイベントとして、毎年当財団で開催しているひょうごボランティアスクエア 21「市民活動団体交流の集い 2016」を、平成 28 年 10 月 23 日(日)木口記念会館大会議室で開催しました。

今年は、北は宮城県から南は熊本県まで、23 団体 49 名の方々にご参加いただきました。お食事をしながら談笑していただく和やかな雰囲気ではじめ、その後、助成対象事業の成果発表や熊本地震の被災障がい者への救援活動の発表があり、参加者のみなさんは熱心に聞いていらっしゃいました。

平成 27 年度助成対象事業の成果発表は、特定非営利活動法人阿蘇きぼうの家(熊本県阿蘇市)、特定非営利活動法人はなのいえ(兵庫県姫路市)一般社団法人シャローム福祉会 ベーシック憩(福島県福島市)の 3 団体に発表していただきました。

また、今年 4 月に連続して発生した熊本地震で被災障害者の救援活動をされている被災地障害者センターくまもと(熊本市東区)にも発表していただきました。



平成 27 年度助成事業成果発表

特定非営利活動法人阿蘇きぼうの家（熊本県阿蘇市）

「阿蘇の高付付加価値米を使った離乳・介護食の製造機の購入」

施設長 湯浅 聡子 さん

まず初めに「阿蘇きぼうの家」の湯浅聡子さんに発表していただきました。「阿蘇きぼうの家」は、熊本県阿蘇市で地域活動支援センターと就労継続支援B型事業所を運営し、地域活動支援センターは27名、就労継続支援B型事業所は15名の障がい者の方が登録しています。助成金で購入されたポン菓子製造機と脱気シーラーで、商品化された「ぼん煎餅」を参加団体のみなさんにお配りして、熊本弁交じりでご紹介されていました。また、熊本地震直後の活動のお話もあり、地震発生2日後には施設を再開して、施設を利用されている仲間への安否確認や、炊き出しなどをされていました。その他、施設は地域住民への物資配給場所の役割を担われるなど、その時必要とされる活動にいち早く取り組まれていました。

そして、湯浅さんは「今回の震災で、精神障がい者の方が被災したときに、障がいの特性を地域の皆さんに理解してもらい避難所生活を続けられるサポート体制が必要です。そのためには、地域活動を通して今以上に障がい者への理解を広く啓発していく必要があることを実感しました。」と話されました。

最後に湯浅さんは、「今回の震災では皆様からのご支援を心より感謝申し上げます。熊本は今、復興に向け歩み始めました。道のりは長いですが熊本火の国パワーで頑張ります。ぜひ復興割をお使いいただき、熊本県阿蘇に旅行に来てください。」と締めくくりました。

また、参加者の感想として、「阿蘇きぼうの家は、さまざまな活動をされている中、B型事業所で農作業やぼん菓子製品の製造販売など、他にない工夫をされている。また、熊本地震の際には地域に役立つ業務をされていて大変参考になった。」とありました。

本当にご苦労も多く、大変な時を過ごされたと思われますが、湯浅さんの持ち前のパワーとお人柄で震災の困難に立ち向かわれているように感じました。熊本県を観光するのも復興の一つかと思いますので、再びたくさんの方が熊本県を観光する日が来ることを願っております。



発表者の湯浅聡子さん

平成 27 年度助成事業成果発表
特定非営利活動法人はなのいえ（兵庫県姫路市）
「障がい者の働く場として地域共生型食堂を建設」

理事長 内海 正子 さん

次に兵庫県姫路市の「はなのいえ」の内海正子さんに発表していただきました。「はなのいえ」は、内海さんのお父様が認知症になったことがきっかけで、富山型デイサービス(地域共生ケア)の理念に共感して、年齢や障がいの有無にかかわらずデイサービス施設を設立しました。また、「地域と共に支える力を高める」を法人の理念として、介護保険事業や障害者相談支援事業、発達障がい児の放課後等デイサービス以外にも地域の居場所づくりとして、空き家を利用した地域サロンを開設しました。

そして、平成27年12月に姫路市内に建物を新築して、「レストランはなのいえ」を開設。就労継続支援 B 型花としてレストランで障がい者メンバーが就労されています。当財団の助成金は新築費用の一部にあてていただきました。

内海さんは、「レストランができたことで、子どもとお年寄りとの間をつないでくれる新しい就労メンバーが増えた。最初はレストランのお客で来られていたご近所の人たちが、レストランのスタッフや通所する障がい者メンバーの送迎スタッフ、レストランのコーヒーマスターなど気がつけばいろいろな人がはなの家のスタッフになっていた」と波及効果を述べてくださいました。また、レストランでの出会いがアンテナショップやさをり織り工房など次のステップにつながり、就労の場所が拡大しています。

同じ障害者の就労支援事業をされている参加者から、「はなのいえの発表聞いて、いろいろアイデアをいただいた。」や、「はなのいえのお話は当法人がめざしていることです。地域の人たちとの交流を深め利用者であってもボランティアをすることに共感しました。ぜひ交流させてもらいたい。」などの感想がありました。

福祉の枠にとらわれない取り組みをされていて、これからまた地域の人たちをさらに巻き込んでどう広がっていくのかをますます楽しみにしています。



発表者の内海正子さん

平成 27 年度助成事業成果発表

一般社団法人シャローム福祉会 指定福祉サービス事業所ベーシック憩 (福島県福島市)

「施設利用者の体調管理と衛生管理・PC 保守のための空調設備工事」

佐藤 憲吉 さん

一条 仁 さん

助成事業成果発表の最後は、福島県福島市の「ベーシック憩」の職員、佐藤健吉さんと一条仁さんに発表していただきました。「ベーシック憩」は、就労継続支援B型と就労移行支援事業の通所施設です。木工班、お菓子班、PC 班に分かれて、木工作业や焼菓子の製造、パソコンを使ったチラシやパンフレットの作成、事業所の「憩新聞」の作成などの作業をしていて、班ごとの作業内容を詳しくご紹介していただきました。また、ご近所の方々にパソコン教室を開いたり、お菓子の販売コーナーには飲食のできるスペースもあって地域の方との交流も深められています。ちなみに、今回の発表で使用したパワーポイントは、PC 班のみなさんが作成していただいたもので、スカイプを使用した会議の様子や助成金で設置したエアコンについての感想を動画で紹介するなど、とても工夫されていてわかりやすく、好評でした。

発表の最後に、職員の佐藤さんは、「東日本大震災から5年経ちましたが、憩のご近所でも、原発の事故で避難されている人がいて、まだまだ東北の被災地も復興半ばです。この東日本大震災が風化することなく、引き続き東北地域にも支援をしてもらいたい」とおっしゃっていました。

当財団の立木選考委員長も述べていたように、東日本大震災の被災地についても、全国被災地への支援と同様に当財団の助成事業として引き続き取り組んでいきたいと思っています。



発表者の佐藤憲吉さん(左)、一条 仁さん

熊本地震被災障がい者救援活動(平成28年度助成対象事業経過発表)

被災地障害者センターくまもと(JDF 熊本支援センター) (熊本市東区)

「被災障害者の救援活動と地域福祉サービス拠点の運営」

事務局長 東 俊裕 さん

そして今回は特別に平成28年度熊本地震緊急助成の助成対象となった「被災地障害者センターくまもと」の東俊裕さんにお越しいただき、被災障害者の救援活動の現状、問題点や今後の課題について発表していただきました。「被災地障害者センターくまもと」は、熊本地震発災後、地元の障害者団体をベースに全国の障害者支援団体と連携して、被災障害者の支援を目的に設立された団体です。

地震直後、被災した障害者が地域の避難所で生活するのが困難であったことから、緊急で熊本学園大学内に障害者が避難生活を送りやすい避難所を設営されました。また、どこの事業所とのつながりもない在宅障害者の支援が必要なことから、「さまざまな困りごとについてどんなことでも手助けします」というSOSのチラシを避難所に配布したり、熊本市にかけあって市内の障害者への情報提供として、チラシを郵送してもらいました。その結果、多い時で一日70件もの派遣依頼の電話があり、これまで2000回以上の個別支援活動をされてきました。支援物資の提供や屋根のブルーシート張りや水道管の補修、がれきの撤去など多岐にわたってあらゆる支援をされています。

また、仮設住宅は障害者が生活しにくい造りとなっていると東さんは指摘します。スロープは付いているが、室内では、トイレとお風呂の入り口がせまく、車いす利用者使用できないという問題があり、なかなかインクルーシブな合理的配慮がなされていない状況です。災害時に障害者が生活することを考えたバリアフリーの仮設住宅を作り、地域の中で生活できるようにしてほしいということをおっしゃっていました。

今後は益城町に活動拠点を移し、災害時支援と継続的な被災障害者の支援に取り組まれます。災害支援後の障害者の地域生活支援の形をどう作り上げていくかが今後の課題です。そのためにも地域生活支援事業の受け皿となるように新しい法人を立ち上げて事業に取り組んでいくとのことでした。

被災障害者の支援活動を継続していくために寄付金の受付が続けられています。資金面の課題もあるかと思いますがボランティアの確保も大変だと思います。全国からの支援がまだまだ必要だと感じました。



発表者の東俊裕さん

意見交換と交流の時間

活動のアピール



ゆめぱレットの小林佐椰伽さん(右)、小林希依子さん



ざくろの上村和子さん

4団体の発表の後、参加者の意見交換や交流をしていただく時間としました。また、これまで同じテーブルにいる人だけでの交流で終わってしまう場合が多かったので、今回は途中で参加者全員がくじを引いて、席替えをしていただきました。兵庫県内で障害者支援の事業所を運営されている参加者の方からは、「兵庫県内だけではなく、県外の施設の方とお話のできたのでよかった」というご意見をいただきました。

しかし、あまり交流をしていただく時間がなくて、「席替えをしてから名刺交換だけになって、テーブル内で十分に話を聞き合う時間がなかったのが残念だった」とのご意見もありました。来年は改善していきたいと思えます。

そして、参加団体の中から7団体に活動のアピールをしていただきました。みなさんの前で発表を希望される方が少なかったこともあり、司会者がランダムに選んだのですが、急なことにもかかわらず発表をされることに慣れた方ばかりで、会場は盛り上がりしました。

今回の交流の集いでは、「地域とのつながりの大切さ」、「今後の活動の参考になった」などの意見を多くいただきました。それぞれの団体が次につながるきっかけになってもらえると、とてもうれしく思います。

最後になりましたが、ご参加いただいた団体や発表していただいた団体のみなさま、選考委員の立木茂雄様、高橋守雄様、山口一史様、松本博子様、中田智恵海様並びに当財団監事の松本邦雄様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

(文責 浜口)

